

やり残した課題

坂口博

原爆文学研究会に参加して、何度かの発表もさせていただいた。いくつかは論考として、本誌にも掲載してきたが、未だまとめることができない課題がある。

それは、二〇〇四年七月にさかのぼる。研究会の発足に尽力した花田俊典の急逝直後の研究会だった。その意味でも、記憶に残る第11回での報告だ。

「会報」11号には、「B29の記憶——戦争は美しいか」として概略をまとめている。その四年後にも、続く報告を「ヒロシマから重慶へ——「二国平和主義」を超えるために」（24回）としてさせていただいたが、その後、長く中断したままになっている。「結論」も、一応は出しているが、それでよかったのだろうか。日本（現実には沖縄を除く）だけの「平和」を希求する、国家公認の「平和主義」（「平和」というイデオロギー装置、信仰）は、批判的に超えていきたい。

最大の理由は、わたしの怠惰だ。本誌10号でも「次の十年」の課題としたにもかかわらず、である。

日本国内だけでなく、植民地・占領地をふくめた都市空襲史を

振り返りたい意欲は持ち続けてはいる。台湾の空襲については、その後、新たな研究書も出た。

ただ、派生した論考は二本をまとめている。火野葦平『盲目の暦』（創言社、06・6）の解説「若松の戦時下の「記憶」と、丸山豊『月白の道』（創言社、14・1）の解説のうち「文学のなかのビルマ戦」である。

前者は、中国・成都基地から発進したB29が、初めて日本本土へ達した北九州空襲にまつわる「記憶」をたどってみた。一九四四年六月から八月の出来事だ。

後者は、ビルマ戦を、米英中の連合国軍の戦略を考慮しながら検証していった。日本陸軍のインドへ侵攻したインパール作戦は一九四四年三月に始まるが、連合国軍は、同時期に北ビルマ・雲南戦線で反攻を進めた。背景にはインド・中国間のヒマラヤ越えのB29による輸送力の限界があった。また「太平洋戦争」史観の最終的批判としてまとめた。この史観では、ビルマ戦を位置づけることができなかつたのだ。

先日でもB29が出てくる小説を新たに読んだ。それも長崎原爆に

関連したものだ。

野呂邦暢の短篇集『白桃』（みすず書房、11・5）に収められた「藁と火」（初出「すばる」77・6）で、本書が初収録。諫早と推測される「町」で、N市の「原爆」に遭遇した物語だった。少年サトルは、祖母・母とともに、N市から疎開してきていた。

原爆投下後、町の上空で体当たりして、B 29を撃墜する話が出てくる。この史実は確認できずにいる。ただ、投下前年には、そのような出来事もあり、慰霊碑も建立されているようだ。近年、長崎・諫早方面に出かける用件がないが、ぜひ機会をつくって訪れたい。

ほかにも未読のB 29作品は多いだろう。

なお、このB 29への関心は、二〇〇二年の「山家洞窟司令部の幻影——九州独立運動」前後（「絃説」II・04）に遡る。このとき、邀撃した屠龍や、B 29撃墜専用戦闘機として、九州飛行機が開発した震電とともに、B 29も同じ縮尺（1/72）のプラモデルを入手した。写真などでは、もう一つ理解しにくい大小の比較を、模型でしようと考えたのだ。

けっきょく、震電は作成したが、ほかの二つは、そのまま箱に入っている。B 29など、作製しても大きすぎて置く場所がない。この保留と、論考の停滞は、関連しているのかも知れない。